

ショパン：《練習曲集》、《夜想曲集》 より

「ピアノの詩人」と呼ばれるフレデリック・ショパン（1810-49）は、基本的にピアノ曲しか書かなかった作曲家である（協奏曲、室内楽、歌曲も書いたが、いずれもピアノが含まれる）。彼はこの楽器の名手でもあり、ピアノという小宇宙のなかで全ての活動が充足・完結していた。聴衆の耳を惹きつけるような華麗なパッセージを曲に盛り込み、サロンの女性たちを酔わせるような蠱惑的なメロディも生み出したが、むしろショパンの内なる天才は、それらの小曲に類まれで高潔な“詩情”をまとわせたことと言える。

《練習曲集》はその名の通り、ピアノを弾く技術を高めるために書かれた曲集。作品 10 と作品 25 の 2 つがあり、今回演奏されるのは前者（1833）——ショパンが 23 歳の時に作曲したもの。1 歳下のリストに献呈され、練習曲とはいえ、形式・和声・旋律どれをとっても、音楽的な密度や完成度が非常に高く、数あるピアノ曲のなかでも屈指の逸品。有名な「別れ」、「黒鍵」、「革命」などがこの曲集に含まれる。

《夜想曲集》は《マズルカ》と並んで、ショパンが生涯にわたって折々に書き綴った曲集。「夜想曲」というジャンルは 19 世紀初頭にアイルランドの作曲家ジョン・フィールドが創始したとされ、左手の分散和音による伴奏にゆるやかな歌のようなメロディが乗る、といったシンプルなスタイルをもつ。歌が好きだったショパン（彼がベッリーニのオペラを愛していたことはよく知られている）にとって格好の曲種であり、彼は夜想曲を単純な三部形式で構成し、自分流に自由に発展させた。若き日にはシンプルな作品を書いていたが、後年になるにつれ、和声の複雑さや対位的な要素を強め、時には驚くほど劇的に、時には密やかな夢のように、その音楽はより重層的かつ深遠なものへ進化していった。

本公演でヤン・リシエツキは、《練習曲集》op.10 を曲順ごとに演奏し、その曲間に「夜想曲」を挟む。こうしたプログラミングにより、普段とは違った表情や響きが聴こえてくるのではないだろうか。